

ポスト・モダニズムにおける音楽科教育

－わが国の音楽科教育のあり方を求めて－

教科・領域教育専攻

芸術系コース(音楽)

115452E 石崎 真生子

1. 問題の所在と研究の目的

わが国の音楽科教育は学制発布からこれまで100年以上の歴史の上に立っているが、その音楽科教育が深刻な問題を抱えている。それは子どもたちの「音楽の授業離れ」、あるいは「音楽の授業嫌い」というものであり、現在音楽科教育の見直しの必要性が指摘されている。わが国では明治維新以来、ヨーロッパの文化やその文化の持つ合理主義や集団主義などによる国家形成が重視されてきた。音楽科教育においても西洋音楽の重視や学習指導の内容では西洋文化や西洋から受け継いだ思想に依るところが大きい。

近年、音楽科教育だけにとどまらず学校全体で「学級崩壊」という問題を抱えている。なぜこのような事態が起こったのか。それは、現在行われている学校教育のシステムや授業のあり方が現在の社会情勢に見合ったものではないからだ考える。近年、社会においては情報の多様化、価値観の多様化が進み、社会のシステム自体が大きく変化しており、モダニズムからポスト・モダニズムへと大きな転換を見せている。しかし、学校教育はこれまでとほとんど変わりなく同じカリキュラムに沿って行われている。そのため、学校と子どもたちの間に大きなギャップが生じ、これからの社会を担っていく子どもたちにとって学校システムが時代遅れになってしまったのではないだろうか。これからは、新たな社会へ向けてこれまでの教育

のあり方を見直し、学校教育もポスト・モダニズムへと転換していくべきである。

現在、子どもたちや社会が求めるものは多岐に渡っており、もはや音楽、そして音楽教育の中からはだけではポスト・モダニズムへの変革は期待できないのではないだろうか。音楽、そして音楽科教育の意味を見出すには、社会の動きや生活そのものと音楽とのかかわりをトータルに捉えていくことが必要であると考え。本研究においては、そのための一つのステップとしてモダニズムからポスト・モダニズムへの変遷と対比を西洋諸国とわが国の両面から、(1)社会、(2)学校教育、(3)音楽、(4)音楽科教育の4点において考察する。そして、わが国における近未来音楽科教育のあり方を模索し、その実現の可能性を探る。

2. 論文の構成

序 問題の所在と研究の目的

第1章 モダニズムからポスト・モダニズムへ
－社会－

第2章 モダニズムからポスト・モダニズムへ
－学校教育－

第3章 モダニズムからポスト・モダニズムへ
－音楽－

第4章 モダニズムからポスト・モダニズムへ
－音楽科教育－

結語 研究のまとめと今後の課題

第 1 章では、2 つの思想の背景にある社会の動きについて論述し、そこで生まれた思想が人々にどのような影響を与えたのかについて研究した。わが国は、常に西洋文化を模倣するように時代を歩んできたが、現在、高齢化社会、公害による健康被害、環境問題、バブル崩壊による失業者の増加、少年による凶悪犯罪の増加など、社会的にも経済的にも行き詰まりを見せており、これらの問題への早急な対策と解決が求められていることを中心に述べた。

第 2 章では、学校教育の変遷についてその誕生から現在に至るまでについて研究した。産業革命以降、モダニズム国家がその必要性から制度化したのが現在の公教育システムであり、国家は学校教育によって支えられていた。わが国においてそれは、西洋文化に追いつくためのものであった。現在まで、国家はモダニズムに支配されて合理化、画一化された教育を行ったが、モダニズムの崩壊によって学校教育にもその影響が広がっている。モダニズムにおいては、学校で努力をすることがそのまま、社会へ出て高い地位へ就くことに繋がると考えられていたが、現在ではそれは自明のものではなくなっている。そのような中で、学校教育は子どもたちに対し、生きていくための新しい方略を示さなければならないことを中心に述べた。

第 3 章では、音楽の誕生から現在の音楽のあり方までを研究した。かつて、音楽には芸術としての価値が与えられていなかった。しかし、産業革命前後からモダニズムの思想が音楽にも影響しはじめ、音楽に「芸術」としての価値を与え、音楽を高級なものと低級なものに区別しようという動きがみられた。そして、その区別がはっきりするよう、高級音楽を聴くための聴衆を作り出し、過

去の作曲家を「巨匠」に仕立て、高級音楽=統一性という図式を作り上げた。20 世紀以降、その高級音楽のあり方を崩すような音楽が次々と誕生する。それは、高級音楽に対する害としか考えられなかった雑音や騒音、そして沈黙でさえも音楽として認めるというものであった。そして、最近では様々な地域、時代、様式の音楽を同じ価値あるものとして認めようとする動きがあり、西洋伝統音楽の価値観が衰退し新たな音楽思想が興隆している。

第 4 章では、音楽科教育の変遷を古代ギリシアから現在まで研究した。わが国においては、これまでは音楽科教育が情操教育の手段となっていた。戦前の音楽教育は徳目、修身に付随したものとなっており、戦後は道德教育に結びつくものとして扱われていた。また、音楽教育は合理主義、集団主義のモダニズムの下で、これまでは音楽の「美的なもの」を中心に教えることができないでいた。しかし、現在ではポスト・モダニズムとしての音楽教育において創造的な音楽学習が発達し、わが国の伝統音楽を含めた様々な音楽を教材に取り入れるようになり、音楽科教育においても国際化は徐々に進んでいる。これによって、われわれは自分自身を積極的に表現し、様々な音楽に耳を傾けることができるようになった。

結語では、社会、教育、音楽の 3 つと音楽科教育との関わりについて研究した。そして、ポスト・モダニズムとしての理想的な音楽科教育のあり方として、創造的な音楽学習における生徒の表現活動として、コンピューターの活用などの授業展開を中心に述べた。

指導教官

小川昌文